

# 2020 The New Earth

## A travel report

### ——ネイサンの物語——

#### 9. 自分の中の平和

突然、二人の子供が、テラスの様子を見に来た。

「ウィリアムとステファンだよ」と、もう一人の僕が言う。

「ウィリアムはクリスティーナとバウチの息子、そしてステファンはマークとナタリーの息子だ。じきにナタリーにも会えるよ」

「すると、君には子供がいるのか？」僕はバウチに尋ねた。2015年のバウチには子供がおらず、一子子供ができないと思われていた。

「そうなんだ」彼は笑って答えて、自分の息子を膝にのせる。「完璧な子だろう？」ウィリアムは頭を父親の胸に預けた。目は半分閉じかけていたが、興味を引かれて僕を見つめている。本当に良かった。僕は自分の混乱を忘れていた。驚いたことに、ステファンが僕のそばに来て両腕を上げた。僕はとっさに彼を膝にのせた。彼は皿のように大きな目で僕を見ている。そして僕は再び、何か馴染みのない感覚——自分の周りに漂う、圧倒的な愛と喜び——を覚えた。そして僕は、みんながこの事態を承知しているように感じた。涙がこぼれてどうにもならず、流れるままにした。この小さな坊やは指先を僕の鼻にあて、ぶつぶつと唇を鳴らした。

「人生は良いものだよ！」彼が言う。「それを忘れちゃったの？」

僕の内側の殻が打ち砕かれた。ここは一体どうなっているんだ？

「続けて」と僕は言った。「救われる気がするよ」

するとステファンは、僕が予想もしなかったことをした。彼が僕を抱きしめたのだ。こんな一途な献身ぶりを僕は知らない。父親が息子にするようなハグだ。

「すべてうまくいってるよ」と彼が言う。彼は僕を抱き、僕は子どものようにむせび泣く。他の人たちは、敬意を払って見守っている。彼らは、このことをもう知っていたようだ。この小さな坊やは本当に僕を抱いている。僕は彼の中に、子どものものとは思えぬような強さを感じた。

「すべてうまくいってるよ」彼の小さな声が、また繰り返した。すると僕の中で何か反応しているのが感じられる。何か僕の中で変わりつつある。僕の一番深いところから平和が生じた。それに解放されたかのように、自由が目覚め、意識が広がった。とうとう自分の中に平和を見出した。僕がこれまで持っていたあらゆる欲望、恐れ、馬鹿げた考えが押し寄せてくる。まるでそれ——終わりのない**平和**、一体感と調和——から逃れるように。平和を、僕は自分の中に平和を感じることができる。

僕の中の平和。世界との平和な関係。僕はあらゆるものと平和な関係にある。僕はあらゆるものと**一つ**だ。ぼくがすべて**である**。僕は宇宙だ。アルファでありオメガ、上のものであり下のものであり、光と闇であり、そして僕は愛で満たされているものだ。

まるで暗記しているように、マニュエルの言葉が頭の中で響いている。

「自分自身を神性の存在として見ることだ。何の疑いもなく、そのような存在として見ることだ」

鼻の頭に柔らかい感触があり、ぶつぶつという音が聞こえる。涙で濡れた目を開けると、これまで見たこともないような澄み切った目が飛び込んできた。

「人生は良いものだよ！ 決してそれを忘れちゃいけないよ！」とステファンが言う。

今度は僕が彼に聞いた。「君は何者なんだ？」目の前に子どもがいるようには思えない。ある存在が、子どもの体に宿っているように見える。このように子どもを見ているのは、生まれて初めてだ。僕は彼を、まだ僕の膝に座っている、同等の存在として見ている。同等かつ完全なる人物として。

「あなたは誰なの？」彼が質問を返してきた。

「わからない！」

「それはいいことだよ」

「どうして、いいことなんだい？」

「だってあなたは無であると同時にすべてだからだよ。思い出した？」

4歳の子どもが発したこの質問が、再び僕を困惑させる。僕はただ肯いて、「うん。思い出したよ」と言った。

たった今思い出したのは他の人たち。まだそこに座ったままで見守っている。「もうこれで、君は時局への備えができた」もう一人の僕が説明し出した。「これで君も地球の振動数を保つことができるはずだ。そして君を通して、多くの多くの人たちもそうなる。たとえ彼らがまだそのことを知らなくてもね。僕はこのことを知っているんだ。だってもう起きたことなんだから。ジュース飲んだら？」

しばらくしてから、僕はネイサンからの散歩の誘いを受け入れた。ステファンの「処置」以降、これまで味わったことのないような気分である。僕はまったく心安らかで、集中して明晰に思考できる。ポジティブで建設的な考えしか浮かばず、恐れたり心配したりする理由は一切ない。ネイサンと並んで歩いていると、僕は一層気が楽になった。僕の周りにはいる人たちの中で、僕は彼に最も理解されているのを感じる。彼は本当に、僕がどう感じているか分かっているようだ。彼は5年前に、すべてを経験したのだから。それ以降、彼は、今の僕とはまったく違う人物になったようだ。彼は、今の僕よりもずっと落ち着いていて分別心もある。

「ステファンは僕に何をしたの？」庭をしばらく静かに歩いてから尋ねた。

「そしてどうして彼にそんなことができるの？」

「彼は小さなシャーマンなのだ。僕たちは早くからそれに気付いた。彼がハーブやエネルギーワーク、ヒーリングに特別な興味をもっていたからだよ。彼はまだ文字は読めないが、周りの植物については何でも——何て呼ばれているのか、どんな治癒力があるのか——知っている。彼は小さな百科事典みたいだよ。彼には素晴らしい教師たちがいて、彼の母親、ナタリーから多くを受け継いでいる。彼女もこの方面では随分活躍しているんだ。ステファンは他のことにはあまり興味を示さない。彼はすぐに彼女の仕事を手伝えるようになった」

「彼女は仕事に自分の子どもを連れて行くことができるの？ 格好いいね」僕は感心してそう言った。

ネイサンはただ僕を見て笑い出した。

「別の視点から自分自身を見るのって、すごく変な感じ。5年前に、僕の5歳年上の自己が言ってたことは、今だからこそ理解できる。彼も5年前にそう言ったよ！」彼は僕の質問には答えずに、そう言った。